

ものや命を大切にする心を育てる保育



日本保育協会発行「保育界」
2011年3月号－8月号 掲載

目次

- ものや命を大切にすることを育てる保育①：乳幼児期にこそ取り組みたい環境教育（3月号）
- ものや命を大切にすることを育てる保育②：保育者がぜひ理解しておきたいこと（4月号）
- ものや命を大切にすることを育てる保育③：日常的な自然との触れ合いの場づくり（5月号）
- ものや命を大切にすることを育てる保育④：園庭ビオトープのつくり方・使い方（6月号）
- ものや命を大切にすることを育てる保育⑤：農業体験や食を通じて伝えたいこと（7月号）
- ものや命を大切にすることを育てる保育⑥：エコ保育について考える（8月号）

（公財）日本生態系協会とは

（公財）日本生態系協会は、自然と共存し美しく持続するまちづくり・くにづくりに向けた提案を行うシンクタンクです。アメリカと欧州（ドイツ）に事務所を置き、世界各国の行政やNGOと連携を図っています。

政策提案

- 自然と共存した美しい日本をつくるための政策の提案
- 自然や伝統文化など各地の魅力を活かした地域の計画づくり

普及・啓発

- 保育士や幼稚園教諭などを対象とする「こども環境管理士」の認証
- ビオトープ事業を担う最先端の技術者「ビオトープ管理士」の認証
- 「全国学校・園庭ビオトープコンクール」を通じた先進事例の発信
- 海外の保育・幼児教育における環境教育の事例を視察するツアーの企画
- 園庭ビオトープの設置や管理の指導、保育者を対象とした環境教育研修の実施

調査・研究

- 生物の多様性に関する調査・研究
- 健全な自然の生態系を再生する手法の調査・研究
- ・・・など

乳幼児期にこそ取り組みたい環境教育

（財）日本生態系協会会長 池谷 奉文

はじめに

近年、保育の現場から「乳幼児期の環境教育は何をしたらいいのか」というご相談が、環境の専門組織である、私たちの協会に多く寄せられるようになりました。一方で、「乳幼児期には環境教育はまだ早いのではないか」というご意見も耳にします。

国際社会の共通認識としては、「環境教育はあらゆる発達段階で行う必要がある」とされています。では、乳幼児期の環境教育とは何をする事なのかのでしょうか。環境教育というと、特別なことのように聞こえますが、言い換

えれば、しつけと同じように、これらの社会を生きていく上で欠かせない考え方や態度などを身につけさせる教育といえます。保育者の皆さんが、日頃の保育で、すでに行っている「思いやりの心をもちましよう」「ものや命を大切にしましよう」といった呼びかけも、環境教育のひとつなのです。

環境教育が必要な理由

私たちの暮らしは、「野生の生きものたち」「土壌」「水」「大気」「太陽光」の五つの要素からなる自然に支えられて成り立っています。農林水産業も、

工業も、私たちの生活も、健全な自然があつてはじめて成り立ちます。二〇〇五年に、国連が世界各国の研究者と協力をして、私たちが受ける自然の恵みを「生態系サービス」という言葉で整理し直し、発表しています。この生態系サービスは、大きく四つの恵みに分類されています。

一つは、ものとしての恵みです。私たちは、食べものや着るもの、家をつくる木材など、自然の資源を利用し生活しています。今や、野生の生きものの遺伝子さえも、バイオテクノロジーの発達により農業や医療、工業など幅広くに活かされる時代になりました。二

つ目は、健全な環境を整えるという恵みです。自然は水や大気をきれいにしたり、洪水を防いだりし、私たちが暮らしやすい環境を保ってくれます。害虫、害獣など、特定の生きもののみが増えることを抑えるという自然の働きもここに当てはまります。都市部においてカラスが増えるのは、都市部での生態系サービスが失われたからに他なりません。言い換えれば、都市部に

自然が戻ってくれば、カラスが増えることを抑えることができるのです。三つ目は、心に関する恵みです。自然は大人には安らぎを与え、子どもたちには思いやりの心を育む機会を提供します。近年では、自然体験が豊富な子どもほど、豊かな感性、集中力や自己抑制力が身につけている傾向が高いなど、子どもにとって自然とふれ合うことの大切さを示す研究結果も出されるようになってきました。四つ目には、

作物を育てる栄養豊かな土をつくったり、光合成により酸素をつくりだしたり、私たちが生きていく上で不可欠な恵みを与えてくれています。

いま、お金やものの豊かさを優先して追い求めることと引き替えに、「野生の生きものたち」「土壌」「水」「大気」を汚したり、失ったりし、こうした恵みが手に入りにくくなっています。国連の調査では、生態系サービスの約六割が劣化していると報告しています。これが様々な環境問題の本質です。このままでは、私たちは健全に暮らしていくことができません。

私たちは、この現実を見つめ直して、今一度、自然を構成する五つの要素を大切にしながら、仕事をしたり、



図 健全な自然を基盤にして、健全な社会が成り立つ

生活をしたりする人材を育てることが急務となっています。これが環境教育なのです。

環境教育は、自然の知識を与えるだけではありません。自然を大好きになり、日頃の生活の中で自然を大切に思い、より良くしようと行動するための意欲や技能を育てることが大切になります。

ブータンという国から学ぶ

乳幼児期は、特にこれからの人生を左右する心、すなわち価値観を身につける重要な時期です。

では、これからの社会に求められる価値観とはどのようなものなのでしょうか。南アジアにある、ブータンという国を例にご紹介しましょう。

ブータンは、今の国民の幸福だけではなく、将来の国民も幸福に生活できる社会を目指すことを、くにづくりの大きな柱に据え、世界から脚光を浴びた国です。二〇〇四年に国連環境計画（UNEP）より「地球大賞」を表彰されました。

ブータンの当時の国王は、長期的にどのようなくにづくりを進めるかを検討するときに、欧米諸国の動向を見な



ブータンの子どもたち。日常生活の中で文化、伝統が引き継がれている

がら、ものやお金の豊かさのみを追いかける社会に永続的な繁栄はないと考えました。ものやお金の豊かさのみを追いかけた結果、長い年月をかけて培われた自然や文化を軽んじ、人間関係が希薄になり、犯罪や紛争が起きている現実を見たからです。また、様々な環境問題を引き起こす結果にもなっています。

こうした中で、ブータンでは、ものやお金の豊かさではなく、心の豊かさを重んじようと決めました。心の豊かさを得るために、どうしたらいいのでしょうか。ブータンには「生きとし生けるものすべてに思いやりをもち、すべてに関わり合いながら共に生きる」という教えがありました。この教えをもとに、「人と人、人と自然との共存」をくにづくり、人づくりの主軸に置いたのです。

この考え方にに基づき、ブータンでは国土の六割以上は自然の森として保つことを憲法にうたい、農業や工業を発展させる場合にも、土や水や大気を汚さない、野生の生きものを減らさないような方法を奨励しています。また、自然によって育まれた文化や伝統を大切に、平和で穏やかに生活できる社会を目指すしています。小さい子どもたちも外出のときには、民族衣装を身につけます。ブータンの子どもたちは、お父さんやお母さん、近所の人々が、自然や文化、伝統を大切にし、助け合い生活する姿を見ながら、心豊かに生活する上で必要な価値観を身につけています。

子どもたちに体験の場を

乳幼児期の環境教育とは、自然についての知識を教えるのではなく、これからの社会に必要な、「思いやりの心」「ものや命、自然を大切にすること」を育むことに重点をおくことが大切になります。こうした心は、日常的な生活の中での自然体験や、自然にやさしい生活体験を通じて養われていきます。

しかしながら、現代の子どもたちは、お金やものの豊かさのみを追いかける社会の中で、自然と切り離された生活が中心となりました。子どもたちは自然の様々な恵みに支えられて、私たちの暮らしが成り立っていることに、気づきにくくなっています。そして、これからの時代に大切な価値観を、家庭や地域を通じて学ぶ機会を失いつつあります。

こうした時代だからこそ、普段生活する保育所の園庭や園舎、ベランダや屋上で、子どもたちが野生の生きものたち、土壌、水、大気、太陽光と触れあい、興味や関心をもち、大切に暮らしが体験できる工夫を、保育者が用意してあげる必要があります。これこそが、乳幼児期における環境教育の第一歩になります。

保育者がぜひ理解しておきたいこと

財団法人日本生態系協会会長 池谷 奉文

はじめに

思いやりをもち、ものや命、自然を大切にすること。前回、こうした当たり前の心を育てる保育が、これからの社会では、ますます大切になる理由について述べました。こうした心は、日常生活の中で、自然との触れ合いや、周囲の大人たちの振る舞いを通じて育まれます。家庭や地域に、こうした心を育む環境が少なくなっている昨今、生活時間の大半を過ごす保育所が今まで以上に子どもの発育にとって重要な場となります。

保育所において、こうした環境を子

どもたちに提供するためには、保育者の姿勢と意欲がとても大切になります。自然や環境について正しく理解し、保育者自身が心から自然を大切に思う心を持ち、その上で、園の中での環境作りや生活の仕方を工夫したりする行動力が求められます。こうした保育者の振る舞いが、子どもたちの環境に対する関心呼び起こし、環境の時代に望まれる態度や価値観を身につけることにつながっていきます。

そうしたことから、今回は、保育者として理解しておきたい、自然や環境問題の考え方についてお話をします。

自然を正しく理解していますか？

近年、子どもたちの自然の絵には、パンジーやチューリップなど園芸種や外国の自然の草花が描かれることが多くなりました。池の絵には、赤い金魚や色鮮やかな錦鯉が描かれます。こうした絵からも、現代の子どもたちが、地域の自然に本来くらす野生の生きものが何かがわからなくなっていることが伺えます。そして、日本ならではの四季の美しさ、楽しさがイメージでき

なくなっているのです。これはとても深刻な問題といえます。

自然は、「水」「大気」「土」「太陽の光」、そして「野生の生きものたち」の五つの要素が関係しあって成り立っています。このうち、野生の生きものたちは、水や大気、土、太陽光に支えられて生きています。ですから、水が汚ればくらせない生きものができず、土が失われたり、汚れたりすれば、やはり姿を消す生きものが出てきます。

昔からその地にくらす野鳥や虫、魚たちが、今なお、私たちの周りにくら

しているということは、豊かな自然が残っている証であり、私たち人間が健全な生活ができる環境であることを証明していることとなります。子どもたちにとっては、豊かな感性、表現力を育み、創造性を芽生えさせる場がたくさんあるということになるのです。

こうしたことから、子どもたちには、ペットや飼育動物だけではなく、野生の生きものたちと共に暮らすことがとても大切であることを体験的に伝えていく必要があります。さらに、野生の生きものたちは、地域によって異なります。野生の生きものを通して、子どもたちに、郷土の自然ならではの美しさや楽しさを体感させることは、郷土の特色を見出し、郷土愛を育てる



図 自然の大切さを描いた子どもの絵。日本の自然ではないチューリップが描かれている



図 生態系ピラミッド。野生の生きものを守るためには水、大気、土も守る必要があります

ことにもつながっていきます。

環境問題を正しく理解していますか？

環境問題は、自然を破壊するだけではなく、経済や社会、私たちの生活に大きな影響を及ぼします。これが、環境問題が人類最大の問題と言われる所以です。

さて、環境問題と一言でいっても、いろいろとありすぎて、取り組みうにもわかりにくいという声が寄せられます。たくさんある環境問題は、実は大きく二つに整理することができます。

ひとつは、都市や農地などの拡大を通じて、自然を直接破壊し野生の生きものをたくさん死なせてしまっている問題です。ふたつ目は、便利で豊かな生活を通じて排出した、たくさんゴミが引き起こした問題です。ゴミには液体や気体もあります。地球温暖化の問題も、二酸化炭素などを大量に排出したことによって起きた、ゴミの問題のひとつなのです。

環境問題の原因を整理することにより、解決の考え方も見えてきます。ひとつ目の問題の解決に向けては、今ある自然を残し、かつ失われてしまった自然は再生や創出することです。この

ときに、野生の生きものも移動ができるよう、自然をかたまりで残して、つないでいくことが大切です。これをエコロジカル・ネットワークといいます。欧米諸国では、このエコロジカル・ネットワークの考え方をもち、数十年先のまちづくり計画をつくり、

人と自然が共存したまちづくりを進めています。家の庭や園庭に、地域の自然を取り込むことも、このエコロジカル・ネットワークの小拠点として貢献することになります。ふたつ目のゴミ

の問題の解決に向けては、リサイクルを行う前に、まず質素な生活をおくることです。そのためには、本当に必要なもの、自然を壊して作られていないもの、ゴミをなるべく出さないものを選んで買う、壊れたら修理をし、徹底して使う、という生活を実践することが求められます。子どもたちには、保育所での生活を通じて、この二つの考え方を伝えていきたいものです。

ドイツやオーストラリアでは、いつも自然と触れ合う保育、自然にやさしい生活をおくる保育を奨励する州や園が増えていきます。これは、子どもたちの健全な発達に何が必要かを真剣に議論した結果でした。こうした保育所づくりに対して、保護者の評価も高まっ

てきています。当協会が、毎年企画するドイツ並びにオーストラリアの視察ツアーで訪問する、自然を生かした保育所では、入園希望者が年々増えていくとのこと。

自然を大切に育てる保育者が高く評価される時代へ

乳幼児期に体験を通じて形成される態度や価値観は、その子が生きていく上で、物事を判断するとても重要な指針となります。そして、ここで培われた態度や価値観は、将来的には日本のくづくりに影響していきます。すなわち、保育はくづくりの礎であるとも言えます。

わが国においても、人間形成のために、かつ国際社会の動向をふまえて、自然を生かして積極的に保育を行う保

育者、およびそうした取り組みを推進する保育所が社会的に高く評価される時代を迎えています。但し、現実には、子どもたちを自然と触れ合わせたくとも、保護者などから「危ない」「衛生的に問題」などその重要性がなかなか認められない、社会的な後押しがないという声も聞こえてきます。

そうしたことから、当協会では、環境の専門組織として、平成十九年度から保育者などを対象に「こども環境管理士」という認証制度を設けました。

この制度は、自然を生かした保育を積極的にいう意欲と、そのために必要な考え方をもち保育者などを評価し、広く社会に公表していくものです。当協会では、人と自然が共存する美しいくづくりのために、今後とも、自然を生かした保育をすすめる保育者や、そしてこうした保育を大切にする保育所を、情報提供などを通じて積極的に支援していきます。



図 こども環境管理士のデータベース。協会ウェブサイトに掲載し、自然を生かした保育を進める保育者について、広く情報発信をしている

日常的な自然との触れ合いの場へ

財団法人日本生態系協会会長 池谷 奉文

はじめに

前回までに、生活時間の大半を過ごす保育所の中で、自然との触れ合いの場、水や大気、土を大切にする生活体験の場を設けることが欠かせない理由について述べました。保育において、子どもたちにこうした体験の場を提供することが、時代の要請となっており、人と自然が共存する持続可能なくにつくり大きく寄与することにつな

がっていきます。



園庭につくられた草地のピオトープ(ドイツ)。ピオトープをつくることにより、園庭での子どもたちの遊びがとて多様になった

点を当てて、お話しを進めます。ここで、紹介するのがドイツで生まれた、ピオトープ (BioTop) です。

ピオトープは池だけではなく

当協会が、日本国内で先駆けて、ピオトープを広く紹介してから、二十年ほどが経ちました。今なお、国内では、ピオトープを人工的につくられた自然の池と認識されている方が多くいます。これもピオトープのひとつですが、これが全てではありません。ピオトープとは、「地域の野生の生きものがくらす空間」という意味です。

私たちの周りには、様々な種類のピオトープがすでに存在しています。例えば、どんぐりが実るコナラ林という空間、ススキの原っぱという空間、水草が茂る池という空間、河川敷の石がごろごろした空間など、こうした空間のひとつひとつが野生の生きものにとって大切な住みかであり、ピオトープなのです。ドイツでは、人と自然が共存するまちづくりに向けて、地域にともとのようなピオト

ープの種類があるのか、いま喪失の一途をたどっているピオトープの種類には何かがあるのかなどを整理し、まちづくりのなかで貴重なピオトープを守ったり、必要に応じて再生したりしているのです。

そうしたなかで、ドイツでは、一九八十年代より、子どもたちが日常的に自然に親しみ、触れ合う場として、保育所内などに地域のピオトープを盛んに取り入れられるようになりました。

その理由には、この当時、ドイツでも子どもたちの自然体験の減少が大きな問題になっていたことがあります。子どもたちの豊かな感性や協調性を育むために本来に必要な環境とは何かを見つめ直した結果、園庭ピオトープが積極的に作られるようになったのです。日本国内では、園庭ピオトープという池をつくる傾向にあります。ドイツでは草地や中低木の茂みなどを設けたピオトープが多くつくられています。

園庭ピオトープの魅力

園庭ピオトープをつくることは、子どもたちに自然の圧倒的な多様性に

いての気づきを促すだけでなく、保育所保育指針で求めている、探求する力、人と関わり合う力、表現する力などの育成にも貢献します。園庭ピオトープの魅力の一例を紹介しましょう。

・様々な命と出会う

ピオトープをつくれれば、いろいろな生きものと出会うことができます。草地をつくれれば、チョウやテントウムシなどが訪れます。池をつくれれば、シオカラトンボや赤とんぼの仲間の姿をあらわすことができます。地域の自然に生える木を植えれば、その花や実には様々な虫たちが集まってきます。様々な生きものたちの営みに接することにより、子どもたちの探求心が膨らみ始めます。

・感覚の働きが豊かになる

園庭ピオトープでは、こうした生きものたちとの出会いとあわせて、花や草の匂い、野鳥や虫の声、若葉の柔らかさや落ち葉を踏みしめる感触など、体全体で季節の移ろいを感じます。こうした五感を通じた体験は、映像や絵本では得ることはできません。

・自発的な遊びの選択肢が増える

子どもの遊びとは、与えられるものではなく、自発的に行動することが大切です。自発性を促すためには、個々



園庭に積み上げられた枯れ枝も、子どもたちの大切な遊び道具（ドイツ）

の子どもたちの多様な興味や関心に応えるだけの空間や素材が必要です。生きものを捕まえることに夢中になる子、色塗りをするために赤や黄色のお花集めに没頭する子、ごっこ遊びをするためにひたすら草の実を集める子など、園庭ビオトープは、子どもたちに様々な遊びの素材を提供します。

・遊びが広がる、発展する

園庭ビオトープでの遊びは、次々と発展していきます。例えば、はじめは生きものを探したり、つかまえたりと、体をつかった遊びに熱中します。次に、そうした遊びの中で様々なことに気づき、疑問をもち始めます。「なぜ、このチョウはこの草ばかりにいるの?」「この地面にあってはいる穴はなに?」など、興味関心は次々と変化していきます。遊びを通じて、いろいろなことを

知りたい、調べたい、確かめたいと遊びの内容が変化していきます。

・人間関係や表現を豊かにする

園庭ビオトープで生きものと出会えば、「あそこで生きものを見つけたよ」と、先生やお友達に伝えたいくなるでしょう。独占するのではなく、みんなと一緒に見ることに楽しさや喜びにも気づきます。またお友達にも「そつとつかまないと死んじゃうよ」って教えてあげる機会もできます。生きものへの思いやりと同時に、人への思いやりも育むことになります。

ドイツが求める園庭ビオトープの

活用の留意点

ドイツでは、園庭ビオトープを普及させようと、州やNGOなどが中心となつて各地でコンクールを開催し、優れた実践を広く紹介する取り組みを行っています。こうしたコンクールの評価の観点をみると、自然との触れ合いの場の提供だけでなく、保育者の援助の姿勢や保護者との連携なども重要であることを指摘しています。また園庭ビオトープにとどまらず、地域の自然の中にも出かけて、双方を使い分けることも促しています。

参考までに、コンクールを催している州のひとつ、ノルトライン・ヴェストファーレン州が示す評価の観点を紹介します。

- ・園庭を地域の自然に近づけているか
- ・園庭ビオトープは、一日中子どもたちが使用できるようになっているか
- ・保育者は、子どもたちが自発的に自然と親しみ、触れ合うよう援助しているか

- ・園庭ビオトープと地域の自然を効果的に使い分けているか

- ・管理作業に、子どもたちや保護者が参加しているか

・活動に持続性はあるか 等

子どもたちに本当に必要な環境を

私たち大人は、子どもたちの豊かな感性や協調性などを育むために、本当に必要な環境とは何かを常に考えながら、今で最も善の体験の場を子どもたちに与えていく必要があります。園舎と同じように、園庭の環境づくりにも積極的に目を向けていく必要があるのです。

「都会で自然が乏しいから」「園庭が広くないから」と悲観



当協会のウェブサイトでは、毎年8月と2月に実施している視察ツアーで訪問した、海外の素晴らしい園庭ビオトープ等の事例を紹介しています。こちらぜひご覧ください

することはありません。都心にある建物の屋上でビオトープをつくったら、シジュウカラなど十種類の野鳥と、トンボやチョウなど約百八十種類の昆虫が訪れたという記録もあります。このことは、周辺に自然がなくとも、面積があまりなくとも、ビオトープをつくれれば、子どもたちは今まで以上にたくさん生きものたちと出会う可能性があることを示しています。

子どもたちと生きものとの出会いの空間は、前述した屋上以外にも、前庭や中庭、ベランダや生け垣、フェンスなど様々な空間を利用し、実現することが可能です。来月は、そのポイントについて説明します。



全国学校ビオトープコンクール2009でドイツ大使館賞を受賞した福岡市立壱岐保育所（福岡県）。園庭に設けた草地（約38㎡）は子どもたちの大好きな遊び場となっている。

園庭ビオトープのつくり方・使い方

財団法人日本生態系協会会長 池谷 奉文

はじめに

前回までに、乳幼児期における環境教育の大切さ、保育者自身が環境に対して積極的に興味関心をもつことの重要性、子どもたちが日常的に自然と触れ合う場となる「園庭ビオトープ」の魅力などについてお話ししました。

今回は、日頃寄せられる質問を踏まえて、園庭ビオトープをつくるときのポイントについてお話しします。

ビオトープづくりは大変？

乾燥したところに、トンボなどが訪れるように池などをつくろうとすると防水シートを敷いたり、水源を確保したりと、時間とお金がかかります。施工後も、水量を維持するなどの管理が欠かせません。

しかし、ビオトープは池だけではありません。今まで、春から秋にかけて行ってきた除草を控えるだけで、その場所は草地というビオトープになります。草も木と同じように生きものにとつて、とても大切なものです。草が生えれば、

子どもたちの大好きなバツタやコオロギ、カマキリ、ダンゴムシなどの生きものが集まってくることでしよう。

草が生え過ぎることにとまどいを感じるという方は、抜くのではなく、適度に刈るようにしましょう。刈った草は、草地の脇にかためて積んでお

けば、コオロギなどが好む隠れ家になります。丈の低い草地でも、そこに生える草を求めて、いろいろな生きものが訪れるはずですよ。

逆に、園庭で除草を控えても、ツクシ、スミレ、ヨモギ、エノコログサ、ススキなど、自然の草が生えてこないこともあります。園庭の土の中に種子がないのです。そうした場合には、園がある流域の一番近い自然に出かけて、草の種子を採集するか、冬期にその土を少しもらい、園庭の土に混ぜてみましょう。春には、土に含まれた種子から、いろいろな自然の草が芽を出すことでしよう。

面積が確保できないと難しい？

園庭ビオトープは、広くつくることであれば、よりダイナミックに自然の営みを体験したり、観察したりすることができそうです。

しかし、都市域でそうした場所が確保できない場合には、線状に、または点状に、生きものと子どもたちが出会う空間をつくる工夫をしていきましょう。

線状につくる場合には、園舎や塀に沿って幅数十センチメートルで地域の自然に見られる草を生やしたり、ガマズミなど地域の林に見られる低木で生け垣をつくったり、カラスウリやスイカズラなどのつる性の植物でフェンスを覆ってみたりするなどが挙げられます。ここで大切なのは、園芸種や外来種ではなく、その地域の自然にもともと生えている植物を用いることです。なぜ、地域の自然に生える植物が良いのでしょうか。

地域の自然にくらす虫たちは、今まで地域の自然に生える植物を食べて生きてきました。ですから、地域の自然の植物があると、園芸種や外来種よりも、いろいろな虫たちがくらすことができるのです。例えば、ノイバラという林に生える低木には、ミツバチやハナムグリ、アワフキムシやオトシブミなどが葉を食べたり、花の蜜などを吸いに集まります。そうした虫たちがいることで、次に肉食のカマキリ、クモの仲間が集まってきます。わずかなスペースであっても、地域の自然の植物があれば、いろいろな生きもののたちの営みを見ることができるようですよ。

こうした地域の自然の植物を植える場合、同じ種類をたくさん植えるので

はなく、様々な種類を植えると良いでしょう。それぞれの植物を好む生きものが集まり、生きものの多様性が増すことになります。

点状にビオトープをつくる場合には、拳ほどの大きさの石、または落ち葉、枯れ木を積み上げたりすることなどが挙げられます。トカゲなどの隠れ家となったり、落ち葉や枯れ木に産卵する虫たちが集まってくることでしょう。はじめは線状や点状のビオトープでも、数を増やし、つなげていけば面近づきます。小さなビオトープは、大きなビオトープの第一歩なのです。

自然に詳しくないとつけれない？

園庭ビオトープをつくるときのお手本は地域の自然です。ですから、地域の自然にどんな木や草が生えているのか、どんな虫や鳥がくらしているのかわかる必要があります。

しかし、地域の自然を学習するといっても、どこから手をつけてよいか悩まれる方も多いかと思えます。そうしたときには、まず地域の自然の専門家を見つけることから始めましょう。当協会では、ビオトープの専門家である「ビオトープ管理士」、自然との触れ合いを大切にする保育の場づくりの専門

家「こども環境管理士」を認証し、その存在を広く発信しています。こうした専門家に相談してみたいかがでしうか。また当協会では、園庭ビオトープや学校ビオトープを通じて自然と触れ合う活動を熱心に行う保育所や幼稚園、小中学校などを、隔年で開催するコンクールを通じて収集し、全国に紹介しています。こうした実践園や実践校の担当者に相談をしても良いでしょう。これらの情報は、当協会のウェブサイトを通じて、無償で公開しています。

園庭ビオトープづくりをきっかけに、地域のいろいろな方々と連携の輪を広げていきましょう。

保育者の役割として大切なことは？

ひとつは、保護者や地域の方々への情報発信です。子どもたちの豊かな感性や協調性などを育むために、園庭ビオトープが必要であることを伝えて、理解してもらう必要があります。計画段階から、積極的に情報を発信していくと良いでしょう。また施工後も、園庭ビオトープで子どもたちがどんな遊びをしているかなど、継続して発信をしていきましょう。

二つ目は、子どもたちの安全管理で

す。限られた面積につくった園庭ビオトープでも、イラガの幼虫など触ると怪我をする生きものがいることもあります。しかし、こうした危険な生きものはそれほど多くなく、それぞれ特徴的です。生きものの知識に乏しくても、短時間で覚えることができます。危険な生きものの知識をもって、子どもたちが遊ぶ前には、こうした生きものがいないか、園庭ビオトープ内を確認しましょう。そして、危険な生きものを見つけたら、むやみに排除するのではなく、子どもたちに危険な生きものであることをきちんと教えると共に、状況によっては「触らずにそっと観察するのであれば大丈夫」と、命の大切さや生きものの共存を考えさせる機会としたいものです。

三つ目は、子どもたちに自然と触れ合うことの楽しさを伝えることです。保育者の中には、自然や生きものの知識に乏しいことから、伝えることに自信がない方もいることでしょう。知識がなくとも、子どもたちに、自然は楽しいと気づかせることは可能です。そのためにも、まず保育者自身が、園庭ビオトープを日々じっくりと観察し、「きれい」「かわいい」「面白い」などを見つけて楽しむことです。子どもたちは、園庭ビオトープでの保育者のそうした目の輝きをよく見ています。きっと子どもたちは、興味津々に「なにを見ているの？」と尋ねてくることでしょう。そうした声をきっかけに、子どもたちに自然の楽しさを紹介していきます。



「全国学校・園庭ビオトープコンクール 2011（厚生労働省、日本保育協会ほか後援）」の募集が始まりました。既に園庭ビオトープがある保育所の皆様、ぜひご参加ください。詳しくは当協会のウェブサイトをご覧ください。またウェブサイトからは、過去に受賞した事例を掲載した報告書も無償でダウンロードできます。



農地の一部に、自然を取り戻すことを呼びかけるポスター
(オランダ)

農業体験や食を通じて伝えたいこと

財団法人日本生態系協会会長 池谷 奉文

はじめに

私たちの暮らしは、多くの自然の恵みに支えられて成り立っています。今の子どもたちは、日々の暮らしの中で、このことに気づいたり、実感したりする機会を失いつつあります。そうしたなかで、農業体験や食事は、私たちの暮らしと自然とのつながりに気づく機会を、子どもたちに提供します。今回は、生活時間の多くを過ごす保育所の中で、農業体験や食事を通じて

菜園は自然の恵みを感じるところ

て、子どもたちに実感してもらいたいこと、そうした体験を進めるときに保育者が認識しておきたいことについてお話しします。

菜園で作物を育てる体験は、子どもたちに様々な気づきを与えます。日頃、食べているトマトやサツマイモなどが大きく育つまでの様子、育てることの楽しさや大変さを理解すること、収穫された作物を大事に食べる気持ちなどが育つていきます。

また、農業体験は、おいしい作物を育てるために栄養豊かな土、たくさん水や太陽の光、自然の生きものたちが欠かせないことを実感する機会になります。

例えば、母なる大地とも言われる土。温暖な地域では、土が1cmの厚さになるのに、約百年から三百年かかると言われています。落ち葉や小さな生きものたちの働きにより、土ができるのに長い時間がかかるのです。こうしてできた栄養豊かな土は、温暖な地域では地表から三〇～五〇cm程度しかあ

りません。私たちはこの厚さの土を大切に使いながら、おいしい作物を育てています。近年、この大切な土が、雨風などによって流されたり、飛ばされたりし、農地からなくなりつつあることが世界的に大きな問題になっていきます。

子どもたちには農業体験を通して、栄養豊かな土とはどんなものか、匂いや手触りから実感させ、「土つてとても大切なものなんだよ」ということを伝えたいものです。

例えば、菜園では嫌われがちな自然の生きものたち。でも、自然の生きものたちは、作物が大きくなるのを、いろいろなところで支えています。ミミズは落ち葉や枯れ草などを食べて、栄養豊かな土ができるお手伝いをします。ですから、菜園の土にミミズがいることはとても良いことなのです。チヨウやハチなどは、おいしい実が成るように一生懸命に花粉を運びます。こうした自然の生きものたちが身近からいなくなればなるほど、おいしい作物が育ちにくくなるのです。

の子どもたちは、虫を見つけるたびに、「虫さん、がんばれ！」って応援していました。この園の子どもたちは、自然に支えられておいしい作物が育つことを感じ始めていました。

菜園に自然の生きものたちがくらせる工夫を

農地は、作物を育てる大切な場所です。しかし農地では、地域の自然の草や木は取り除かれるため、作物を好む特定の生きもの以外はくらすことができません。農地が増えるということは、自然の様々な生きものたちが住みかを失うことになるのです。今、国際社会では、農地が広がることにより、自然が失われていくことが大きな問題になっていきます。

そうした問題を踏まえて、海外では、農業の仕方や農地のあり方を、自然にやさしいかたちへと変える動きが進んでいます。土や水を汚さない、健康に安全な作物を育てるために農薬や化学肥料を極力使わない農業が、そのひとつです。これに加えて、自然の様々な生きものたちがくらすことができるように、農地に木の茂みや自然の草が生える草地などのビオトープをつくる場所が増えています。農地にビオト



左は私たち人間が食べる作物、右は虫たちが食べる自然の草。この菜園ではどちらにも水をあげて一生懸命育てている（オーストラリア）

ープをつくると、害虫が増えるのではないかと心配される方も多いと思います。実は、逆に害虫を減らす効果があるのです。農地に自然の様々な生きものたちがくらし始めることで、農地にも自然界の「食う・食われる」の仕組みができ、作物に被害を与える一部の生きものだけがたくさん増えることを抑えることになるのです。

こうした考え方を、実際に子どもたちにも体験させている事例が、以前に訪問したオーストラリアにありました。菜園の中に、作物とは別に、自然の草が生える場所を設けています。保育者等は、子どもたちに「こっちは人

間が食べる植物、そっちは虫たちが食べる植物。作物も自然の草もどちらもとても大切なもの」と説明をします。子どもたちは、このことをきちんと理解し、自然のことを考えた菜園のあり方を日々の体験を通じて学んでいました。

料理や食事を通じて育みたい心

料理体験や食事のときにも、保育者の考え方次第で、土や大気、水、自然の生きものたちを大切に育てる心や態度が身につけていきます。その主だった心や態度をご紹介します。

・旬のものを大切にする

食が豊かになる中で、私たちは、いつでも、いろいろなものを食べたいと思うようになりました。例えば、真夏に育つキュウリを一年中食べたいという欲求が大きくなったことから、キュウリはビニールハウスでつくられるようになりました。ビニールハウスをつくるためには石油が必要です。つくった後もビニールハウス内を温めたり、いろいろな機械を動かしたりする燃料、さらに化学肥料や農薬をつくるためにも、石油が欠かせ

ません。今や、キュウリをつくれなくなるほど、石油を使い、二酸化炭素などをたくさん出し、地球温暖化の問題につながっています。これからは、石油をたくさん使うことを抑えなくてはなりません。そのためには、私たちは夏にはナスやキュウリ、冬にはハクサイやホウレンソウなど、季節にあった旬の作物を選ぶことが大切です。

子どもたちには、おいしい「旬」の作物を選んで食べる、また食を通じて日本の四季を楽しむ心を身につけさせたいものです。

・地域でとれたものを大切にする

遠くでとれた作物や魚、乳製品などを買うことも、実は地球温暖化を悪化させることにつながっています。遠くでとれたものを車や飛行機などで運ぶときに、たくさんの石油を使い、たくさんの二酸化炭素などが大気を汚すからです。

逆に、地域でとれたものを選ぶことは、運ぶための石油もわずかで済み、二酸化炭素などをたくさん出すことはありません。

また、地域でとれたものを選んで食べることは、環境にやさしい以外にも、いろいろな良いことがあります。収穫してから、それほど時間をあけず

に手に入るので、栄養も豊かでおいしい作物や魚などを食べることが出来ます。また、育てた農家の方がわかれば、お互いに感謝する気持ちが出てきます。地域の絆が深まります。

保育所では「これ、あそこのおじさんがつくったニンジンだよ。今度、おいしかったつてお礼を言おうね」などの会話ができると良いですね。子どもたちに、保育所での普段の生活を通じて、地域でつくられたもの、とれたものを当たり前のように選ぶ態度を育てていきたいものです。

・地域の食文化を大切に育てる

日本には、様々な気候風土があります。この気候風土に応じて、産物ができ、その産物によって様々な料理が考え出されてきました。例えば、ドジョウがたくさんいる自然があつた地域では、どじょう鍋、どじょう汁などの郷土料理が生まりました。子どもたちには、こうした地域の食文化をきちんと引き継ぎ、その食文化が生まれた理由も含めて、きちんと伝えたいものです。

地域の食文化を大切にしていることは、地域の自然を大切にしていることにもつながります。そして、ふるさと意識を育てることにもなるのです。

「エコ保育」について考える

財団法人日本生態系協会会長 池谷 幸文

はじめに

先だって、子どもたちとお話をしてきた時のことです。「え、水道の水って、あの川の水なの？」とびっくりした顔が並びました。その子どもたちは、そこで初めて、自然に流れる川の水を自分たちが利用していることに気づいたのです。

連載の初回で述べたとおり、現代の子どもたちは、私たちの暮らしが自然の様々な恵みに支えられて成り立っていることに、気づく機会や体験の場を失いつつあります。そうした中で、自然の恵みについてお話をしても、実感することは難しいでしょう。

だからこそ、日中の大半を過ごす保

育所での生活を通じて、自然を構成す

る「野生の生きものたち」「土」「水」「大気」「太陽の光」と触れあい、これらと私たちの暮らしとのつながりに気づき、大切に暮らしたいという気持ちで、私たちが大人が環境を整えていく必要があるのです。これこそが、近年耳にするようになった「エコ保育」の重要なねらいと言えます。ちなみに、先月まで紹介していた園庭ビオトープも、エコ保育の主要な取り組みのひとつとなります。

最終回となる今回は、園庭ビオトープ以外のエコ保育の取り組みについて、過去に当協会が企画したツアーで訪問したオーストラリアのビクトリア

州やニューサウスウェルズ州の保育所での取り組みを例にお話しします。

水が無駄にしない生活の体験

オーストラリアの保育所では、園庭に大きな雨水タンクが設置されているのによく見かけます。

こうした園の子どもたちは、菜園で作物の世話をしたり、水遊びをしたりする時には、まずこの雨水タンクの水を使います。園によっては、雨水タンクの水がなくなると、次に雨が降るまで水遊びはお預けというところもありました。その園の子どもたちは、次の雨を心待ちにします。

水を大切にする工夫は、他にもあります。ある園では、昼食やおやつの際の後片付けのときに、コップにあまった水を流しに捨てません。子どもたちは、あまった水をじょうろに集めて菜園の作物にあげに行きます。

また、ある園では、園庭に植えている植物の種類を見直しました。芝生や園芸外来種の多くは、夏場に水をたくさんあげなくてはなりません。これらの植物を、水が少なくとも育つ、地域在来の自然の草や木に入れ替えました。作業は、子どもたちや保護者も参加して、みんなで行いました。地元種による自然の草や木を植えたことで、子どもたちは自然のいろ

土をより良くする生活の体験

菜園で作物をつくることは、土と私たちの暮らしとのつながりを実感する良い機会になります。あわせて、コンポストを活用して堆肥をつくり、そこでつくられた堆肥を菜園にまくなどの体験も、生活を通じて土を意識することになります。

視察したオーストラリアの各園では、ミミズの写真が貼られた容器が園舎の中に置いてあります。昼食やおやつの後片付けのときに、子どもたちはお皿に残った果物の皮などをその容器に入れます。保育者は、その容器にはミミズさんが食べられるものを入れるように、と子どもたちに教えています。



子どもたちはやっぱり水遊びが大好き。雨水を使って遊ぶ (オーストラリア)



菜園に設置されたコンポスト。ミミズさんが食べられるものを入れるというルールになっている（オーストラリア）

毎日、この容器に入ったものをコンポストに入れるのも子どもたちが行います。こうした日頃の活動を通じて、子どもたちは自然に分解されて堆肥になるものとならないものが区別できるようになります。

コンポストでつくられた堆肥は、おいしい作物ができるように、子どもたちもお手伝いし、菜園にまかれます。こうした一連の作業を通じて、子どもたちは、自然におけるものの循環についても体験を通じて理解していきま

大気などを汚さない生活の体験

ゴミは燃やされることによって二酸化炭素などを出して、大気を汚します。日本では、ゴミを減らす取り組みとし

てリサイクルがよく紹介されます。リサイクルは、たしかに燃やすゴミの量を減らすために欠かせない取り組みです。しかし、オーストラリアの各園では、リサイクルはゴミを減らす最後の手段と位置づけていました。なぜなら、リサイクルをしても、その過程でゴミはでるからです。

例えば、使用した缶やペットボトルをリサイクルする場合には、まず集めてリサイクル工場に運ぶ必要があります。その段階で、運ぶために車などが使用されますので、二酸化炭素などの排気ガスが大気を汚します。またリサイクル工場では、再加工するために、たくさんエネルギーを使い、やはり二酸化炭素などが大気を汚します。

そうしたことから、オーストラリアの各園では、リサイクル以前に、ものを無駄にしない「つつましさ」の心を育むことを重要視し、生活の仕方を見直しています。

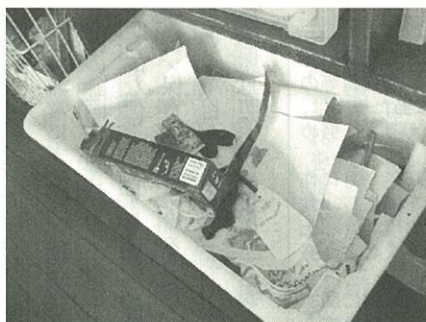
具体的な取り組みとしては、①本当に必要なものを買う、②買うときには使い捨てのものや石油製品は極力避けて自然の素材のものを選んで買う、③買ったものは大切に使う、④壊れたら徹底的に修理して使う、⑤いらなくなったら他の用途で使いまわすことを実

践していました。その上で、捨てるを得ないものについて、必要に応じてリサイクルを行っていました。

子どもたちは、保育者が壊れた物を修理し、大切に使う様子をよく見ています。保育所の中で、ものを大切に扱うこと、ゴミを少なくすることの態度や考え方を自然と身につけていました。また、電気などのエネルギーの使用を控えることも徹底されています。太陽の光や自然の風を園舎内にうまく取り入れる園舎の設計上の工夫とともに、使わない電気は徹底して消すなどしていました。風力や太陽光パネルの設置以前に、エネルギーを無駄にしない工夫を徹底して行っていました。

最後に

この一連の連載では、環境の専門機関として、海外の事例などを交えながら、保育所内で普段できることについてご紹介してきました。今回取り上げたエコ保育も、保育所内での特別なイベントであってはなりません。これからの時代を考えた場合、保育所で日常的に行われてこそ、子どもたちに自然の恵みに気づかせ、環境の時代を生きるために必要な態度や価値観を育むことになります。



お絵かきした紙などを入れる箱。この紙は、次は工作などに使われる（オーストラリア）

あわせて、私たちは地域のあり方も見直していく必要があります。こうした、子どもたちの態度や価値観は、本来は地域が一体となって育てていくべきものです。それが健全な地域の姿と言っても過言ではないでしょう。日本国内では、こうした健全な地域が姿を消しつつあります。子どもたちのためにも、これからの地域づくりでは、地域在来の自然、文化、歴史を大切に、人と人、人と自然が共存する美しい地域づくりを、目指していくことが不可欠と言えます。

当協会では、これからも子どもたちが健全に育つことができるように、地域づくり、そして保育所の取り組みを様々なかたちで支援していきま

